



TITLE:

都市先住者のエスニシティー「バタヴィア先住民」ブタウィの集落と帰属意識ー(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

中村, 昇平

CITATION:

中村, 昇平. 都市先住者のエスニシティー「バタヴィア先住民」ブタウィの集落と帰属意識ー. 京都大学, 2018, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2018-03-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20839>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	中村 昇平
論文題目	都市先住者のエスニシティ ——「バタヴィア先住民」ブタウィの集落と帰属意識——		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論の目的は、ジャカルタ大都市圏の「バタヴィア先住民」ことブタウィBetawiの事例に注目し、複雑多様な都市空間に暮らす先住者が帰属意識の基本単位として想像する都市集落コミュニティkampungの社会編成を分析することで、集団帰属意識の動態を日常次元の対面相互行為状況における個人の認識と表象にまで踏み込んで説明することにある。個人の認識と表象を集落コミュニティの日常生活や社会活動と切り離すことのできないものと捉え、そこにエスニシティへの帰属意識がどのようにあらわれるかを考察する。こうした考察を通して本論が目指すのは、エスニシティの可変性や柔軟性の起点を、戦略的／能動的に行為する主体として想定された個人の内部に見出すのではなく、個人が時に能動的に参与し、時に巻き込まれる中で形成され、変容していく集落コミュニティの生活の中にこそ見出すことである。</p> <p>第1章では、「ブタウィ」という集団観念の歴史的変遷を整理するために、植民地期に諸集団がクレオール化した経緯を説明した上で、独立後の変化を論じた。独立後は国家の介入の下に地理的認識枠組とエスニシティの区分を密接に結びつける公定の集団観念（民族）^{スワ・バンサ}が住民に広く浸透した。その過程で、ブタウィ内部の集団意識の差異が顕在化した^{スワ・バンサ}が、これらのうちどれか一部の文化実践を単独で採用するかたちで公式文化が制定されるのではなく、異なる集団の文化実践や生活様式が並存するかたちで公式文化として採用された。その結果、国家が文化政策を通して民族観念^{スワ・バンサ}の抽象化と均質化を推し進めたにもかかわらず、「ブタウィ」の枠組みは明確な内的差異を温存し続け、こうした顕著な内的多様性を容認する集団枠組となった。</p> <p>第2章では、ブタウィを標榜する大衆組織に注目し、権威主義体制崩壊後の2000年代以降に大規模な動員が可能となった経緯を、民主化・地方分権化・政治のポピュリズム化といった要因に加えて、組織中央と末端支部との関係から考察した。組織の発展初期における動員の様態はエスニシティという抽象的な動員原理ではなく集落の原理に大きく拠っていた。大規模化した組織を見ても、その組織構成は集落を基礎とした諸地域の社会関係を通した動員に頼るところが大きい。こうした考察を通して、エスニシティという抽象的な動員原理を掲げる大衆組織による動員のあり方においてさえ、集落の意識がその基盤となっていることを示した。</p>			

第3章では、ブタウィの人々の日常生活の中で差異がどのように認識・表象されるのかを考察した。その結果明らかとなったのは、「ブタウィ」という抽象的カテゴリーへの帰属意識の根底に出自集落への帰属意識があること、つまり、第1章で論じたブタウィの枠組内部の集団意識の差異の根底には出自集落の差異に関する意識があることだった。

第4章では、カンブン・ウタンと呼ばれる集落の社会編成を考察することで、いかにコミュニティ意識が形成され、維持されるかを説明した。「カンブン」は「集落」を意味する語として日常使われるが、本論の事例では行政村落制度に組み込まれていない自生的な集落を指す。カンブン・ウタンは先行研究が実体的なコミュニティの範囲と想定した規模を越えており、その地理的範囲を裏付ける行政制度も無い。ところが、親族範疇によって外延が規定された集落が、個人の単独性において互いを認識する先住者同士の人間関係に基づいたコミュニティとして想像されている。この認識に基づいて先住者が独自に営む組織・活動がある。埋葬互助組織や青年会の考察から明らかになったのは、集落の活動が何度頓挫し休止に追い込まれても、先住者が繰り返しその再興を試みてきたこと、そして、それらの自発的活動が例外なく「集落」を単位としたことだった。このように、国家政策で整備されたブタウィ・エスニシティの概念は住民の意識に広く浸透する一方で、ブタウィの人々の日常生活では集団内の差異が強く意識されており、先住者コミュニティの自発的な社会組織と活動における実感を伴って認識・表象されている集落の単位がそうした内的差異／多様性の基礎的な認識枠組となっている。

第5章ではコミュニティをとりまく活動の中で個々人が周囲の社会性にどのように参与し、巻き込まれているのかを詳細に考察し、日常実践レベルにおける差異／多様性の認識と表象の動態を説明する。具体的には、カンブン・ウタンの武術実践を例にとって伝統の継承と保護に対する住民の捉え方を考察することから、集落意識の変化と維持について考察する。この考察から明らかとなったのは、第一に、伝統的文化実践の教授と理解においては論理と体感を核として個々の動きの裏にある意味や意図を適切に理解することが求められていること、第二に、論理と体感に裏付けられた適切な理解を達成すれば、動きに変化を加えることが自然であり、場合によっては、変化する周囲の状況に合わせて適切な変化を加えることが必要であると考えられていること、第三に、改変の歴史的経緯から差異が生じるのは自然なことであり、尊重すべき多様性であると捉えられることである。

これらを念頭に武術実践に関わる日常場面で集落を軸とした差異がいかに認識・表象されるのかを考察して明らかとなったのは、まず、人々が日常実践の中で差異を「独自性」として——個人に特有な創造性の発露が歴史的に連なる

過程として——認識・表象しているということである。武術実践に関わる対面相互行為の過程で人々は周囲の社会状況・物理環境の推移や周囲の個々人の動向に多大な注意を払った上でそこに参加し、巻き込まれているのである。さらに、他流派間の交流の場におけるコミュニケーションのあり方の考察からは、そうした差異を対面相互行為の場面で——少なくとも表層的には——寛容し、尊重するコミュニケーションが日常頻繁に繰り返されていることも分かった。「独自性としての差異」を尊重するやり取りは反復されることでルーティン化し、差異を尊重するコミュニケーションの型が生成・維持されていた。

これまで個人に注目したエスニシティ論は、個別に切り取られた個人の認識や表象の中にあられるエスニシティを説明することで、外から押し付けられた集団観念を操作・改変する個人の能動性に固定的な集団観念を打ち崩す可能性を見出そうとした。本論は、集団観念を戦略的に操作・改変する能動的な存在としてのみ個人を想定するのではなく、周囲の環境に巻き込まれながら、時に即興的に、時に熟慮の上で行動する存在として個人を想定し、個人の認識と表象を、個人をとりまく環境と社会性から切り離すことのできないかたちで展開する複雑で経路依存的な過程として把握しようと試みた。

民族^{スグ・バンサ}という下位集団単位の文化的多様性を称揚する一方、住民を均質で一元的なカテゴリーに分類した上で管理・動員しようとする支配者の影響を、ブタウィは首都において直接的に受けてきた。その一方で、本論の主要調査対象とした集落の先住者は、日常生活にまで介入して住民を管理・動員する思惑の下で国家が整備し、押し付けた行政村落システムによっては把握すらされない自生的集落の意識や社会的まとまりを保持し続けた。この現状は集落コミュニティの社会实践がたどった経路依存的な過程の暫定的帰結であるが、同時に、個々の住民生活の歴史性を体現するものでもある。

本論はこの現代的状況を、周囲の社会性と環境に関与していく個人を焦点として説明した。コミュニティの意識と社会的まとまりを維持するために行われる集落の活動の中で、その中核にあるのはあくまで個人の意図と関心、理解だった。論理と体感を伴った適切な理解から生まれる差異を個人の創造性の発露として尊重し、それを内的な多様性として称揚するコミュニケーションの型が作法として個々人に定着している。本論の事例では支配者に押し付けられた抽象的で一元的な集団観念を住民が内面化しているにもかかわらず、差異／独自性の認識が強く維持され、その差異を尊重する作法が維持されている。本論に見たような偶発的な歴史過程の現時点での帰結として、本論の事例においては、固定的で分断的な集団観念を押し付けようとする国家政策の理念とは真逆の性格をもった集団帰属意識の動態が生じている。その偶発的な過程は、その

都度その都度特定の意図と関心を持つ個人が、特定の社会状況と環境の中に関与していき、その社会性の中で創造性を発揮してそこに変更を加えてきた固有の歴史性を体現しているのである。

(論文審査の結果の要旨)

本研究は、インドネシアの首都ジャカルタの「バタヴィア先住民」であるブタウィをとりあげて、現代インドネシア社会におけるエスニシティの動態を伝統的な集落意識との複層的な相関を軸に解明した独創性にあふれた社会学的論考である。また本論文は、2012年から2017年にかけて断続的に実施された29カ月に及ぶ長期のフィールド調査にもとづく精密で貴重な都市民族誌でもある。

本研究の社会学的意義は以下の二点にまとめられる。第一は、インドネシア社会におけるエスニシティと国民国家の形成と展開について、17世紀からはじまる植民地支配の影響の歴史的検討を踏まえて、独自の視点から解明を試みた理論的意義である。第二は、ブタウィ・エスニシティの拡張と生成・維持・強化において伝統的集落への帰属意識が重要な役割を果たしていることを詳細なフィールドデータによって明らかにした実証的な意義である。

インドネシアに限らず、20世紀半ばに欧米列強の植民地支配からの独立を勝ちとったアジア・アフリカ社会においては、新たに誕生した近代国民国家のシステムと、それぞれの社会に深く根付いているエスニシティをめぐる制度や規範が、原理的にも実践的にも相対立し、国民国家の形成を阻害しているという認識がひろく浸透していた。インドネシアの場合、クリフォード・ギアーツがこの認識を完成させてきたことはよく知られている。

本研究は、このギアーツ・テーゼに対してまったく異なる視座を提供することで、この認識枠組を根源的に批判するという理論的な挑戦をおこなっている。そのために本研究は以下の三段階の議論を展開する。第一は、エスニシティ生成の通時的な動態の変化を、植民地時代から独立まで丹念にたどる、歴史社会学的検討であり、第二に、独立以降のインドネシア国家の「民族政策」のなかに大衆的なエスニシティの変容を位置づける政治社会学的検討である。そして第三に、現在のエスニックな帰属意識にもとづく組織がジャカルタ大都市圏で果たす社会的な役割を分析する都市社会学的分析である。

ブタウィという民族は、17世紀から始まるオランダ植民地支配の過程で、東インド諸島各地から「バタヴィア」に連れて来られた異なる文化的背景をもつ「原住民Inlanders」が、イスラムへの改宗を経てクレオール化し、アマルガム化して形成されていったとされる。独立以降のインドネシア社会において、民族suku bangsa意識の制御は、つねに国家の人民統治の政策的根幹としてあった。そのなかで、国家の政策に規定されながらも、そこから相対的に自律したエスニシティの生成をめぐる実践に注目して、本研究は両者の折衝・交渉・葛藤を詳細に分析する。その事例の一つが、「ブタウィ結束フォーラムForum Betawi Rempug (FBR)」である。ストリートの逸脱者や暴力的な自警団としてスティグマ化されてきたFBRが、実際にはブタウィ・エスニシティの帰属意識を日

常生活世界のなかで拡張し、体系的な組織網の建設と圧倒的多数の人びとを糾合することで、社会的文化的な秩序維持機能のみならず、新たな創造的機能まで果たしていると本研究は主張する。新たな創造的機能のなかでも特筆すべきは、その異質性に対する寛容性であり包摂力である。ブタウィ意識の拡張のなかで、元来「バタヴィア」に出自をもつイスラム化した「原住民Inlanders」であったブタウィに、歴史的にも文化的にも異質な外部者が、「アラブ系ブタウィ」「中華系ブタウィ」「キリスト教ブタウィ」として包摂されるようになった。こうして国民国家統合の障害物であり、分断対立の元凶とされてきた「民族意識」は、異質な人々を統合し包摂する装置として、多民族社会としてのインドネシアの形成と発展に貢献してきたことが明らかにされた。

この異質な他者を包摂し統合するさいに、大きな影響力を発揮したのが、集落（カンブン）を軸にしたドメスティック（生活共同的）な帰属意識だと本研究は強調する。従来の都市コミュニティ研究では、主要な研究関心は、大きな伝統的な領域単位ではなく、路地、近隣、住民組織におかれてきた。これに対して、本研究は、現在、意識化される機会の少ない伝統的な地縁単位（ブタウィ社会の場合のカンブンkampung）が、民族文化の実践を通して意識化され連帯の資源とされている点に着目する。草分け住民の系譜や親族範疇の認識の共有による共同意識、モスク管理組織、埋葬組織、自発的社会組織を通じた共同活動、さらにはブタウィ文化の核である民族武術の実践pencak silatによる帰属意識の再確認などの詳細で緻密な検討を通してカンブンが意識化・資源化されることで、ブタウィ・エスニシティが地縁コミュニティ意識と融合・接続しながら、異質な人々へと開放されていく過程を解明することに成功している。

とはいえ本論に問題がないわけではない。都市コミュニティに登場する自警団的組織のもつ危うい両面性（国家の統治エージェントとしての抑圧的で分断的機能と自発的住民組織としての統合性、自律性）の検討が不十分なまま肯定的な結論が用意されている点や、伝統的地縁共同体が断片的にしか記述されておらず生活世界全体での位置づけが十分なされているとは言い難い点などは今後改めるべき問題点である。しかし、こうした弱点については本人も自覚しており、本論全体の意義を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2018年2月9日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。